



静岡茶再生に向けて県の施策などを説明する佐田氏

静岡支店 静岡茶再生に向け 勉強会開催

2024年の静岡県の荒茶生産量は全国2位に転落しました。こうしたなか、荒茶生産量の回復に向けて県内茶業界の現状と課題などを学ぶ勉強会を開催。日本公庫静岡支店の職員他、静岡県信用農業協同組合連合会の職員12人が参加しました。

勉強会には静岡県経済産業部農業局お茶振興課長の佐田康稔氏が登壇。県として「静岡茶再生に向け、静岡茶の統一ブランド策定と輸出向け茶葉の生産基盤強化を両輪で推進していく」と力説。参加者との活発な意見交換もおこなわれました。（4月23日）



学生は、特に、産業としての農業の実態に興味を示され、熱のこもった講座となりました

津支店 「農業の概要」を出張講義 90人超の三重大学生が聴講

毎年、三重大学人文学部における「コーポレートファイナンス」の講座の一部として、農業の概要について講義しています。

今回は、日本の食料需給の動向や農業を取り巻く「ひと」「土地」「カネ」の状況、そして、三重県内の農業と津支店の取り組みについて、日本公庫職員が説明。94人の学生が聴講しました。

学生からは、講義内容や公庫における仕事のやりがいに関する質問が寄せられ、未来の三重県の農業ならびに日本の農業の次世代を担う学生の関心の高さが感じられました。（6月4日）



農業経営開始時のポイントについての解説に聞き入る受講生

山形支店 東北農林専門職大学で講義 就農ノウハウなどを伝える

東北初の農林業系専門職大学として2024年4月に開学した山形県立東北農林専門職大学で日本公庫職員が出張講義を実施。1年生50人が受講しました。

講義では、就農事例に基づき農業経営開始時のポイントなどを解説。成功や失敗の要因を分析するグループワークも実施し、学生同士で真剣に意見が交わされました。受講生からは、「就農の準備段階において大切なポイントや就農後に発生し得るリスクとその対策、資金繰りの重要性について、認識を深めることができた」などの感想が寄せられました。（6月6日）

千葉支店 肉用牛・酪農経営改善へ 資金繰り勉強会を開催

経営環境が厳しい肉用牛・酪農経営を支援するため、「畜産経営を資金繰りから考える」をテーマにした勉強会を一般社団法人千葉県農業協会と共催。千葉県内28人の経営者が参加しました。

勉強会では、日本公庫職員が業種特性を踏まえた資金繰り把握の重要性を説明し、参加者は自身の決算書を用いて運転資金必要額を計算しました。

参加者からは「借りる側だけでなく、金融機関の目線という、普段聞くことができない内容を聞けて、非常に勉強になった」などの声が寄せられました。（6月19日）



勉強会では畜産業の昨今の変化についても説明し、参加者は熱心に耳を傾けていました

次号予告 秋2号(11月発行)

農業法人における現場リーダーの育成(仮)

高齢化・人手不足が深刻な農業界に求められるのが、次代を担う人材の育成だ。経営感覚を持った経営者はもちろん、忙しい経営者に代わり技術と管理能力を備えた農場長クラスの人材が欠かせない。現場リーダーの養成と組織強化の道筋を考える。

ご意見募集

今号はいかがでしたでしょうか。感想やご意見をお寄せください。FAX・eメールなどで受け付けています。掲載させていただいた方には薄謝を進呈いたします。

FAX: 03-3270-2350
eメール: anjoho@jfc.go.jp

いつもAFCフォーラムを楽しみに読ませていただいております。以前勤務していた試験場では、2年間飼料用イネ作りに従事していました。今は別の行政の仕事に従事していますが、試験場におけるイネ作りの経験は財産として生かしています。

例えば、苗代作りの大変さや、代かきなど一つ一つの作業の重要性に気づいたことです。苗代作りや代かきが上手にできているかいかで、イネの生育の仕方や雑草の生え方が変わってきます。それから、試験場には地元の集落に位置する水田があったので、水路掃除の大変さも学んだことの一つです。夏場の草刈りも大変でした。

今、小規模な農家は採算がとれずに、どんどん農業を辞めてい

てしまっています。しかし、もともと狭い水田が多く、中山間地も多い日本では、小規模な農家も大事にしないと、日本の農業は維持することができなくなるだろうと思います。

水路清掃や草刈りなどの変な仕事でも、集落で人を出し合い、大規模な農家の人も小規模な農家の人も、皆で一緒に作業すれば水路や水田の周囲がきれいになります。そうして初めて水が得られ、コメが育ちます。

行政での仕事においては、とかく補助事業の採択要件に規模拡大を求められます。でも、私は小規模な農家も大事にしないと、そのうち農業をする人はいなくなってしまうと思うのです。

(福岡県岡垣町 岸本 純子)

編集後記

④海面水温の上昇や黒潮大蛇行といった海洋環境の変化を一因に、各地の漁獲量が大きく変動している。今号では、さまざまな立場で変化に対応しようとする方々の取り組みを伺った。新たな操業体制の構築や各種データの収集・活用、震災からの復旧・復興など、新たな道を切り開いていくさまに、日本の漁業の可能性を感じた。(清野)

④「農と食の邂逅」の取材で漁港に行くと、多くの船が帰港し水揚げをしていました。陸から見ると海は青く穏やかなのに、海の中では海水温の上昇などにより魚の生態系に大きな変化が起きていると土屋水産の皆さまから伺いました。その環境の変化に対応すべく、対策を出漁する現場の声を聞き認識を新たにしました。(澤田)

④今号よりAFCフォーラム編集部に加わらせていただきました。以後よろしくお願ひいたします。最近、あらゆる食品の価格上昇が続いていますが、今年は脂の乗ったサンマが手の届く価格で店頭に並んでおり、繰り返し手に取っています。海洋環境の変化は目に見えませんが、食生活と密接に関係していることを実感します。(黒川)

④今号より編集に携わらせていただきました。以後よろしくお願ひいたします。黒潮の大蛇行は今年4月に終息したものの、海水面上昇に伴う水産物の危機的状況には変わりないかと思ひます。今号を読んだ皆さまが、こうした状況についての理解を深め、自分として何ができるかを少しでも考えていただければ幸いです。(村上)

AFCフォーラム 2025.10 秋1号

編集

小柳 典義 清野 健 宮崎 善幸
澤田 真理 岩本 悠里 黒川 知洋
村上 裕紀 水谷 徳子

編集協力

金子 弘道

発行

株式会社日本政策金融公庫
農林水産事業本部

〒100-0004
東京都千代田区大手町1-9-4
大手町フィナンシャルシティ ノースタワー
Tel. 03(3270)2268
Fax. 03(3270)2350
E-mail anjoho@jfc.go.jp

印刷

株式会社DI Palette 東京本部

* 本誌に掲載している記事、写真、図表、データなどをご利用になりたい場合は、事前に当社までご連絡ください。